

春日 彩花（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）

よろしく申し上げます。お二人の応用的なとか実践的なものとはちょっと違って、もう少しマニアックなところを今回ご紹介して、その中で何かあればいいかなと思うのですけれども、私は「質的・量的アプローチを用いた知恵概念の検討」ということで今回ご紹介したいと思います。

質的研究と量的研究どちらもやっていたのはやっていたのですけれども、実は混合研究法というのは不勉強で全く知らないままやっていて、このお話をいただいてから勉強してみて、あんなほどと思っていたのですけれども、今日の午前中にお話を聞いてようやくその概要が掴めたという感じなので、ちょっと変なことを言うかもしれませんがご容赦ください。

ではお話ししていきたいと思います。高齢期に私は基本的に注目をして研究していることになっているのですけれども、高齢であるというところで結構身体的な機能が低下したりだとか認知機能が低下したりだとか、あるいはネガティブなライフイベントが増えたりというようなところで、かなりネガティブなイメージをもっているところが多いと思います。

実際問題としてこういったネガティブな側面というのは高齢期に起こってくるものだと思うのですけれども、一方で高齢であるということと知恵があるという非常にポジティブなことが関連して語られることがあるのです。実際に一般のイメージとしても、小説の中で主人公に対する助言をする人として高齢者が登場することもありますし、一般の人々に知恵ってどんなものだと思いますかというのを聞いてみると、高齢であるとかあるいは経験豊富であるといったようなことが必ず語られる、共通して語られるというのがあります。

実際に歴史的な文献を見てみても、哲学書でニコマコス倫理学なんかでもその長年の経験によって知られるものであるとか、あるいは『ダンマパダ』というのは仏教教典なののですけれども、そういった中でも「身体の衰えにかかわらず人生における学びの中で培われる衰えない側面である」というような書き方がされたりするというので、今回はあえてネガティブなところでなくポジ

ティブなものとして語られる知恵があるということが、どういう意味を持つのかというところに注目をしています。

知恵というのは生涯を通じて高まりうる側面として理解されてきた一般概念です。一般概念というのは一般的に使われてきた概念ということです。心理学ではそういったポジティブな側面というのに注目が集まって、高齢期のポジティブなものとなり得るのではないかと期待され、研究されてきたものになります。なので研究者の中では、その知恵のある人というのはより良い問題解決をする存在であるとか、優れた助言をする存在であるとか、あるいは自分自身に精神的安定や幸福感をもたらす存在であるといったようなところで期待をしてきたのですけれども、ただ一方で、一般概念であるということから非常に研究者によって定義が異なってしまうという問題があります。

一般概念であるがゆえにということをお話しましたが、その知恵の概念の検討にあたって実は3つアプローチの方法があるというふうに言われています。1つは知的考古学と言われるもので、先ほど歴史的な文献にとかいう話をしましたけれども、歴史的な文献、例えば旧約聖書であるとか哲学書、それから仏教の教典などといったような文献において知恵というのがどのような意味で用いられているのかというのを調べる方法が1つあります。

2つ目が潜在的意味論研究というちょっと耳慣れない言葉なのですが、一般の人々にとって知恵というのがどのように理解されているのかというのを探索的に調べる方法になります。

もう1つが明示的理論研究というので、これは心理学的な理論に基づいた理解ということで、例えば人格発達とか認知発達とか知能の発達の理論の中で知恵をどのように位置づけているかというのを操作的に定義していく研究になります。

一般的には、心理学的な概念の定義というのは操作的に行われるべきものだと思うのですが、先ほどから何回も言っていますように一般概念であるということで、一般的な理解から乖離するのは望ましくないということで、このような多角的なアプローチが用いられてきたという経緯があります。

こういった研究を通してレビューをする中で見てみますと、知恵という概念には大きく2つの特徴があるというふうに考えられます。1つは多次元的な概

念であるということで、例えば知恵がある人ってどんな人かっていったときに、知識が豊富でよくそれを使える人であったりとか、内省的に自分の経験を見ることができる人であったりとか、反省することができる人であったりとか、すごく幅広い視野を持っている人であったりとか、人に対して共感的な人であったりとか、いろんな要素というのが知恵の中には兼ね備えられているというのが1つあります。

もう1つあるのが文化差があるということが言われています。日本での研究は実はほとんどなくて海外での研究が主なのですが、実は西洋、東洋で知恵という概念の理解の仕方が若干異なっているということが言われていたりするということで、こういった背景もありまして知恵の定義、それからその定義に基づいた測定方法というのが多様になっているというのが現状の課題になっています。

いろいろと研究は進められているのですが、今回改めて知恵という概念を理解するための枠組みを改めて検討していく必要があるのじゃないかということで問題意識を持っています。あと海外で作成された尺度や測定方法を日本語化して日本で実施する研究が、数は少ないのですがいくつかあるのですが、ただ日本人にとっての知恵はそれで本当に評価できているかというところ、文化差があるということなので、本当にそうかと思ったら微妙だよなというのがるので、今回日本人における知恵というのも考える必要があるのじゃないかということで問題意識を持っています。

今の目的と進捗状況を今日はお話しようかなと思うのですが、目的としては知恵という概念の構造を明らかにすることで、まず第一に研究1では、知恵を包括的に理解するための枠組みを文献レビューで検討しました。というのは知恵の定義はざっと数えただけでも20個ぐらいはあるので、それらの中で共通する構造みたいなものがあるんじゃないかということで、まず第一の研究では検討しています。研究2ではインタビュー調査を行っています。質的調査なのですが、日本人の方に実際にインタビューをして、知恵がある人ってどういう人だと思うかというのを聞いていくというような調査を行いました。

混合研究法的な言い方をしてしまっているのかどうかまだ分からないのです

けれども、先ほど抱井先生のお話にもあったような探索的順次デザインに近いような方法という感じで、そのインタビューで得られた発言要素を踏まえて質問紙を作るということをやっています。

まず、今回本筋にはあまり関わらないのでこの辺はさらりと飛ばしてしまおうと思いますが、研究1で文献レビューを行って理論的枠組みの構築を行いました。ここで認識しておいていただきたいのが、知恵には2つの側面があるということだけここで頭に入れていただければ、そのあとの話は通じていくと思いますが、1つは機能的側面というもので、これは知恵があると考えられる行動に関わる能力に関する側面です。つまり知識を有効に活用する力であったりとか優れた対人技能であったりというような、例えばですけれどもこういった能力的なものが知恵の1側面としてあり得るのではないかということです。

もう1つの側面が構造的側面ということで、これは知恵に関わる心理的・内面的な特徴です。例えば視野の広さであったりとか思慮深さ、直観性、内省、共感、思いやりといったような心理的な特徴というのがこの構造的側面に含まれるものということで、この2つの側面によって知恵が形づくられているんじゃないかというのが、この枠組みの概要になります。

ここからがメインになってくるのですが、研究2ではインタビュー調査を行っています。ちょっと人数は少ないのですが、中高年の方15名を対象として半構造化インタビューを行いました。一応インタビューするごとに分析をしていって、要素が新しく出なくなる、理論的飽和に至るまでやっているのですが、一応15名で少ないのですが今回はOKということにしています。

分析方法としてはGrounded Theory Approachのオープンコーディングを行っています。その結果、このような要素というかカテゴリーが抽出されたのですが、これらを先ほどの理論的枠組みに照合してというか照らし合わせて考えてみると、5つの大きなカテゴリーに分けることができると思いますし、さらにそれを2つの側面で説明できるのではないかというふうに考えました。この赤字になっているのが日本人に特有のというか、新しく出てきた要素になっています。

そこから測定方法の検討をしようということ考えていたのですが、

個人において知恵がどのくらいあるかというのを検討しようということで考えたのですが、この2つの側面においてどういう方法で測るのがいいかということ考えたときに、機能的側面というのは能力的な側面になっていますので、行動の客観評価がいいのではないかなと思いました。もう1つが構造的側面なのですが、この構造的側面に関しては心理的な特徴を報告してもらうものになるので、これは内観報告というか自分自身で評価してもらうのが適切なのではないかというふうに考えまして、今回とりあえずこの機能的側面はにおいて、構造的側面の質問紙を作成したということがあります。

ということで、日本人向けの知恵尺度の開発ということで研究3を行いました。研究2で得られた要素と実際の発言を踏まえて90項目の知恵尺度を作成しています。Web調査を行ったので結構サンプル数が多いのですが、探索的因子分析を行った結果、6因子構造を持つ尺度として作ることができました。このあとも実はいろいろと分析はしているのですが、今回は割愛します。

改めて今回混合研究法ということだったので、自分の中でどういう意図でやっていたのかというのを改めて考えてみました。今回インタビューを行って知恵というのがどのような意味を持つのかというのを聞き出していったのですが、なぜ質的研究でなければいけなかったかというのを考えてみたときに、量的研究で実はやっているのもあって、多次元尺度などを用いて研究する場合もあるのですが、ただそうしたときに新しい要素というのを抽出するのがなかなか難しい。今回はどちらかというと文化差というのを視野に入れていたので、新しい要素が出てくる可能性があると思っていたので、やはりそこは質的にちゃんと聞いていく必要があったということです。

あともう1つ、これは私はすごく重要だと思うのですが、特にこういう概念研究を行うときに、言葉の選び方というのが個人によって違う可能性があるというのがあるのです。例えば知恵だと「賢い人」というふうにパッと言う人がいるのですが、よくよくそのあと話を聞いていくと、「賢い」でも使い方がいろいろあって、知識が豊富であるということを使う場合があれば、将来の見通しを持っているということの意味して賢いという言葉を使って

いる場合もあったりするので、単純に質問紙を配って自由記述もありますけれどもそういったことでやるよりも、ちゃんとインタビューで聞いていってしっかりと詳細に分析する必要があるというのがあったので、今回あえて質的研究を使ったのだと改めて自分で思いました。

こういった個人の解釈といったものをある程度反映する研究方法を用いなければならなかったということなので、かなり構成主義…構築主義ですかね、構築主義的なものに依拠した質的研究が今回有効だったのではないかというふうに考えています。

これは飛ばしてしまっていたのですが、知恵研究の主な目的として、今回注目しているのは知恵があるというのはどういうことなのかということなので、そのあとのことを考えていくと、やはり知恵研究の目的というのは、知恵があるというのをまず現象として捉えるということに加えて、それがどのようにして培われてきたのかという、発達と言ったら怒られるかもしれませんが、知恵がどのようにして培われたのかという、そういう過程をたどることと、もう一つ、知恵があるということと例えば幸福感であったりとか、何かしらの他の指標との関連を見ていかなければならないというがあるので、今回知恵があるってどういうことなのかということだけを調べるだけでは、たぶん質的研究が割りといいのかなと私は思っているのですが、一方で2番、3番の次の研究のステップに進んでいくにあたって、やはりある程度実用性というのを考慮すると、知恵があるということを数値で表していくほうが有効なのかなというふうに思っています。

例えば知恵がある人にインタビューをしに行きたいとなったときに、知恵がある人を毎回推薦してもらって行くというのもあまり実用的ではありませんし、ある程度知恵があるということと知恵得点が高いというのはイコールではありませんけれども、ある程度そこでスクリーニング的に使うこともできると思います。

あと、他の変数との関連に関しては、やはり数値で示していたほうがそのあとやっていきやすいというのもあるので、そういった意味で私はここで初めて気づいたのですが、やっぱり個人的な解釈というのを重視するアプローチから実証主義的なアプローチというので、少し矛盾が生じているのかなとい

うのを今回考える中で思いました。けれどもやはり実用性を考えると、こういう変遷というのは重要だったのかなというのが1つあります。

もう1つ、今後の研究として私がいま非常にやりたいなと思っているのが、実は研究2のインタビューを振り返ってみますと、知恵がある人についてその対象者によって重視する特徴が異なっていたのです。例えば知恵がある人ってどんな人かって思い浮かべてもらって語ってもらおうと、ある人は知識が豊富であったりとか、判断力が優れているであるとか、想像力に優れているというような、ある意味知的な側面について例えば言う人がいたとして、また別の人に聞いてみると、似たようなことも言うことはあるのですけれども、重視する特徴としては、常識的であるとか、共感的であるとか、優れた対人技能を持っていてコミュニケーションがうまいといったような、そういう別なところに主な焦点を当てて語ってくれる人もいたということで、しっかりここはまだ分析ができていないのですけれども、こういったことがあったということは、もしかしたら「知恵がある人」というのには複数のパターンが存在する可能性があるのではないかなというふうに考えました。

一般的な先行研究のやり方だと、今回やったような本当に、こういう感じで全部高かったら知恵みたいな感じの研究が多いのですけれども、実際にはもしかしたら全部が高かったら知恵があるというわけではなくて、いくつかのパターンに分けられる可能性がある。例えば今回作った尺度を、もし実際に知恵があると推薦された人にやってみたときに、全部高い人ばかりではなくて、ある程度どこかの側面が高い人たちがパターン分けできるのではないかなということもちょっと考えていて、もしかしたらこういうところで質と量というのをうまいこと混合的に…と言ったら語弊があるかもしれませんが、ミックスしていくことができるのではないかなということで考えました。

特に疑問提示はしていませんけれども、以上のような形で私の発表は終わりでございます。

稲葉 どうもありがとうございました。春日先生の発表は、研究の枠組み自体が既に混合研究法に非常に近いものであると思いました。今後、今日ご発表いただいた研究の最終的段階で、抱井先生、八田先生が紹介されたジョイント

ディスプレイ的なもの、つまり統合をうまく表現する図やダイアグラムのようなものを追加されたら、混合研究方法としてのまとまりをより出すことができるという気がいたしました。とにかく全体として、今日のテーマに非常に近い研究をされていると思いました。さらに「日本人特有の知恵」に関する研究それ自体、非常に興味深く拝聴いたしました。どうもありがとうございました。